



TITLE:

# ラヴィントンの景気理論 (1)

AUTHOR(S):

小島, 専孝

---

CITATION:

小島, 専孝. ラヴィントンの景気理論 (1) . 経済論叢 2004, 174(2): 1-17

ISSUE DATE:

2004-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/45643>

RIGHT:

## ラヴィントンの景気理論（1）

小 島 専 孝

### I は じ め に

景気循環の心理説に対する関心は従来から大変希薄である。ハーバラーは、心理説と他の諸理論との相違は強調の違いであって種類の違いではない（Haberler [1937] p. 134）と述べているが、そうしたことも理由の一つかもしれない。また、現代の主流派理論において心理的要因が入る余地がないためか、あるいは、ラヴィントンの『景気循環』の序文で、独白の研究結果というのではなく、主要な考えの多くがマーシャル、ピグー、ロバートソン、ミッチェルから得られていると述べているからなのか、学説史研究の分野においても、ピグー、ラヴィントンの景気理論に関する研究はほとんどない。

本稿は、『景気循環』の構成に従って、ラヴィントンの景気理論をピグー（およびタウシグ）<sup>1)</sup>の景気理論と比較して検討する。

### II 現 象 の 性 質

戦前の理論家が扱う景気循環は、いわゆるジュグラー・サイクルであり、次の特徴がある。

---

1) タウシグ Frank William Taussig (1859-1940) については Schumpeter [1951], Dorfman ([1946-1959] vol. 3, pp. 264-71) を参照されたい。タウシグの『経済学原理』は J. S. ミルの現代化を意図したもので、タウシグはハーヴァード大学正教授になった1892年に、少なくとも英熱圏において政治経済学の現状の標準的な説明としてさしあたり受容される経済学の一般原理の再述、かつてミルの『経済学原理』が得ていたような権威ある書物の必要性を訴えており、マーシャルの『経済学原理』でさえ、ミル以後に現れた最も重要な貢献ではあるが、必要を満たすのに十分ではないと考えていたということである（Dorfman [1946-1959] vol. 3, p. 265）。

- (1) 国際的な連動性
- (2) 7年から11年の周期あるいは約8年の平均周期
- (3) 消費財産業よりも資本財産業において変動が大きいこと

周期についてピグーは、『失業』では「7年から11年の間で変化するように思われる期間」(Pigou [1913] p. 110)と述べていたが、『厚生経済学』初版では、英国労働組合の失業率統計に基づき、1860年以降の失業率極小の間隔を7, 10, 7, 10, 7, 7年、極大の間隔を6, 11, 7, 7, 11, 5年、雇用悪化の平均期間を26/6年、雇用改善の平均期間を21/6年としている<sup>2)</sup>(Pigou [1920] p. 804)。ラヴィントンは「1908年までの45年間におけるヨーロッパの景気循環の平均周期は約8年であった」(Lavington [1922] p. 14)と述べている<sup>3)</sup>。

周期は「不完全」である。それゆえラヴィントンは太陽黒点説のような「天体の動きのような物理的原因」を否定する。他方、ピグーにおいては、農業収穫の変動は依然として重要であり、周期の不完全性はむしろ農業収穫の影響を示すものと解釈される。楽観・悲観の誤りの発覚時期が大豊作と重なれば「ある意味で楽観・悲観の誤りを事後的に正当化し、それゆえ発覚の影響を相殺する」(Pigou [1920] p. 848)。「外生的な出来事が産業の継起的な波動運動の発生時期や振幅を変化させる力があることを認識すれば、観察される収穫変動と産業変動との相関の説明において豊作・不作の側に十分な影響力を与える余地は残る」(Pigou [1920] p. 848)。

消費財産業よりも資本財産業において変動が大きいことは、ラヴィントンが景気循環の原因は現代的産業組織の特性に見出されるべきであるという理由の一つに挙げている<sup>4)</sup>。「たとえばイギリスでは明らかに、ナポレオン戦争勃発直

2) 『産業変動論』(Pigou [1929]) 付録の表1。極小の年は1865年, 1872年, 1882年, 1889年, 1899年, 1906年, 1913年, 極大の年は, 1862年, 1868年, 1879年, 1886年, 1893年, 1904年, 1909年である。

3) ホートリーは「私がもっぱら貨幣的原因によると信ずるのは、景気循環を形成する変動の周期性である」(Hawtrey [1928] p. 175)と述べるにもかかわらず、ホートリーには統計的議論はまったくない。この点はロバートソンに批判されている(Robertson [1915] p. 9, n. 1.)。

4) ピグーは、産業は消費財産業と資本財産業に大別されるとして次のように述べる。「拡張期において両者とも拡大するが、資本財産業のほうがより大きく拡大する。拡張期に続く収縮期にノ

前に厳しい不況をもたらしたものがはっきりと現れた最初の循環である。フランスではアメリカ、イギリス、ドイツのような産業社会に比べて循環の進行が顕著でないことに注目すると、そして高度に組織された商工業の中心地における方が小売業や農業などの周辺よりもそのような影響をより強く受けるというさらに明白な事実を付け加えると、その最初の出現時期というのはとても重要である。なぜなら、そうした状況は、そのようなリズムカルな変動の説明は現代的産業組織の特性に見いだされねばならないことをはっきりと示しているからである」(Lavington [1922] pp. 13-14)。

ビグーの景気循環に対する関心は失業研究から派生したものであったが<sup>5)</sup>、ラヴィントンも次のように述べる。「こうした周期的変動は解説されるべき暗号文としてそれ自体興味あるものだが、その重要性はそれが社会生活の中に引き起こす不安にある。婚姻率が全般的リズムに従うことはたいして重要ではなかろう。貧困と犯罪が同様に増減することは、より重要である。好況期と不況期で失業量が一般に5パーセント、資本財部門のいくつかにおいては10パーセントも変動することは、明らかに最優先の社会的重要性を有する。事業活動のこうした循環的変化が失業のおそらく最も重要な単一原因であるということは、その性質に関する研究を正当化するのに本質的には十分である」(Lavington [1922] p. 16)。

このような景気循環に関する定型化された事実から、ラヴィントンは求められる説明について次のように述べる。「そうした原因に関する真の説明は、現

「においては資本財産業は生産物を大幅に縮小するが、消費財産業はたんに拡張が止まるだけである」(Pigou [1920] p. 802)。ビグーは次のように解釈する。「好況期には雇用労働量は拡大する。拡大は資本財産業で大きく他の産業では比較的小さい。続く不況期には雇用労働量は収縮する。収縮は資本財産業で大きく他の産業では比較的小さい。資本財産業では雇用労働量の大幅な収縮は生産者財の産出の大幅な収縮を伴う。しかし、消費財産業では先の好況の結果として追加的機械設備が生産をかなり容易にするので、雇用労働量の比較的小さい収縮が産出を先の好況期の水準よりも大きく減らすことはない。それゆえ、産業変動は社会全体の消費にではなく用役需要に大きな変動を伴うのではある。……それゆえ、他の事情が等しいかぎり、産業変動は社会厚生に對してとりわけきわめて有害であることを示すのは容易である」(Pigou [1920] p. 803)。

5) 本郷 [2000] を参照されたい。

象の普遍性を説明するのに十分一般的でなければならない。また現代的産業組織の本質的性格に基づかねばならないようにみえる。なぜなら、その影響が最も顕著にあらわれるのは現代的な産業状態においてだからである<sup>6)</sup>。好況、警戒 (apprehension)、不況<sup>7)</sup>の連続的リズムを説明しなければならない。無生物のように厳密に画一的に作用するのではなく、異なる強さと不規則な期間を伴って作用する原因と関連づけて説明されなければならない。こうした条件の性質から、満足できる説明は地球の自然に影響を及ぼしている厳密に決定された天体の動きのような物理的原因に見出されることはありそうにないと思われる。むしろ次のことが示唆される。すなわち、本質的原因は人と生産手段の性質に見いだされねばならない」(Lavington [1922] pp. 16-17)。

### III 現代組織の本質的条件：タウシッグとラヴィントン

ハーバラー (Haberler [1937] p. 134) は、心理的要因を最も強調した理論家としてケインズ、ラヴィントン、ピグーとともにタウシッグを挙げている。

タウシッグの見解は次のようなものである。「より大きい振動——産業恐慌——の原因は、一部分は分業および時間費消的生産すなわち資本主義的生産に見出されるはずであり、一部分は人間本性の基本的特性のいくつかに見出され

6) ラヴィントンは価格の動きについて「経済的リズムを形成する基本的な経済変化のすべての系列で最も顕著でおそらく最も重要なものは価格の系列である。イギリスの最後の7つの循環を平均すると、卸売物価水準は好況期に年率約4パーセント上昇し続く不況期に年率約4パーセント低下した。……事業利潤はより極端な範囲で変動し、利子率および割引率は全般的動きに従い、賃金率はより狭い範囲で変動し卸売物価水準の変化に不確定な「時間の遅れ」を伴って従っている」(Lavington [1922] p. 15) と述べ、産出量については、資本財の建設は好況期と不況期で著しく増減すること、全体としての産出量もまた価格のリズムに従うことを挙げている (Lavington [1922] p. 16)。

7) マーシャルはオーヴァストンの叙述 (「最初は平穏な状態にあり、次に改善——確信の増大——繁栄——興奮——取引過熱——激発——圧迫——沈滞——窮迫——再び平穏で終わる」, Marshall and Marshall [1879] p. 153) を引用するにとどまっていたが、ラヴィントンは、半世紀の平均で約4年の上昇期、上昇期とはほぼ同じ期間の下降期、その間の短い期間で恐慌に至る可能性がある警戒期、という3局面で景気現象を把握している。3局面把握はケンブリッジ学派ではラヴィントンだけである。そもそも景気の「局面」という捉え方自体ミッチェルの影響かもしれない。ちなみにジュグラールは繁栄、恐慌、清算 (liquidation) の3局面把握である。ジュグラールの景気循環理論については Niehans [1992] を参照されたい。

るはずである。人間本性の基本的特性も一部分は経済的であり、一部分は心理的なものである」(Taussig [1911] vol. I, p. 413)。「要するに、不況の原因は種々の種類の誤調整 (maladjustment) に帰されるように思う。そしてそれらはすべて複雑な分業および生産と消費の長い隔たりに関連している。ある特定の種類の資本——鉄道あるいは電気事業あるいは織物工場——の計画に調整の誤りがある。社会の資本総額に対して利用可能な貯蓄総額が正当化するよりも多くの追加がなされるところに調整の誤りがある<sup>8)</sup>。商人および仲介業者のストックが過剰であったり不足したりする<sup>9)</sup>。そうしたすべての不適合 (misfit) が心理的要因のために強められる。あらゆる種類の調整の誤りが大きいほど、その後の再調整と回復のプロセスはより時間がかかり、より難儀なものとなる」(Taussig [1911] vol. I, p. 410)。

このようにタウシグは、「複雑な分業」と「資本主義的生産」によって生

- 
- 8) タウシグが投資の誤調整と呼んでいるものは、「無から生み出される」(Taussig [1921] vol. 1, p. 399) 銀行の信用創造によって新投資が本来の貯蓄を越えて実行されることを指す。「銀行家および活発な実業家は自分自身の蓄積の一部を投資するとはいえ、ファンドの大部分を不活発な投資家から獲得している。自分自身のものであれ他人のものであれ、社会の利用可能な貯蓄よりも多く投資することはできない。けれども、この制約は長期的のものである。また直接作用することはなく、一連の中間商人を通じて作用する」(Taussig [1911] vol. I, pp. 408-409)。投資銀行および投資会社の最重要の役割は新規企業に関する評価である。「けれども、彼らは大衆投資家が購買できる証券総額に関して穿った推測以上の手段を持っていない。強気で希望あふれる時期には、種々の投資会社は躊躇することなく前進し、すべての見込みある企業の証券を購入する。銀行業界もブローカー業界も一丸となって貨幣を貸し借りし、証券を売買している。多くの小者や『外部の』投機家は独立の判断をまったくせず、たんに群衆とともに売買して、あらゆる種類の誇張された声明やうわさを丸呑みし、日々の証券価格の動きだけを考え、感染時には、そうした行動の基礎になる基本的諸力には奇妙にも注目することがない。心理的要因は大きな役割を演じている」(Taussig [1911] vol. I, p. 409)。
- 9) 商人のストックの過不足というのは次のようなことを指す。「商人が自由に買うとき景気がよく、商人が買うのをさし控えるとき景気は悪くなる。商人は心理的感染を免れないだけでなく、ごく簡単な損得勘定によっても動かされる。商人の営みはほとんどもっぱら単なる財の売買であり、商人の成否はほとんど財の価格だけにかかっている。商人の価格に対する態度と反応はかなり長期間にわたって消費者とは異なる。消費者は価格が上がると買う量を減らそうとし、価格が下がるとより多く買おうとする。けれども商人は、究極的には消費者の需要に支配されるとはいえ、市場の推移に関する時々の見込みにきわめて影響される。商人は価格が上がると思うと活発に買い、価格が下がると思うと購買を減す。商人がそのように考えそのように行動するまさにそのことが、前者の場合には物価上昇を強め、後者の場合には物価低下を強めるのである」(Taussig [1911] vol. I, p. 405)。

じる誤算と誤調整、および誤調整が速やかに判明しない可能性を不況の原因とし、心理的要因を増幅要因としている。この点でタウシッグの見解は、〈景気循環の原因は企業家の心中にある〉<sup>10)</sup> というラヴィントンは異なる。しかしながら、ラヴィントンは「事業活動のリズミカルな変動が生じるための不可欠条件」と「そのような条件の下で実際にリズミカルな変動を発生させる原因」とを区別している (Lavington [1922] p. 52)。すなわち、ラヴィントンは変動発生 of 不可欠条件として4つの「現代組織の本質的条件」、

- (1) 生産の責任が自分自身の判断と自分自身のリスクで行動する独立の企業家によって担われていること
- (2) 生産には時間がかかること
- (3) 各企業の生産物の市場が他のすべての企業の生産に依存すること
- (4) 価格の気まぐれな変動によって更なる誤りの可能性があること<sup>11)</sup>

を挙げ、変動を発生させる原因として「事業の確信の一般水準の不安定性」 (Lavington [1922] p. 53) をあげている。ラヴィントンに従えば、「複雑な分業」と「資本主義的生産」は実際にリズミカルな変動を発生させる原因ではなく、リズミカルな変動が生じるための不可欠条件ということになり、タウシッグとラヴィントンの相違は見かけほど大きくはない。

タウシッグは、誤算と誤調整は生産技法の急速な変化が生じるとき最も強力に作用するといひ、産業革命以後の期間および経済発展が急速に進行している国々において恐慌の規模が大きく影響の範囲が広いことを指摘する (Taussig [1911] vol. 1, p. 403)。また「新規起業の資本投資が大きい場合、誤りが生じる可能性は最大であり、また同時に、しっぺ返しを食らうことなく誤りが最も

10) 「もし一般的確信が高いならば全経済組織はブーム状態に駆り立てられ、一般的確信が低いならば全組織は沈滞状態に沈みこむ。それゆえ、景気変動の原因のカギは企業家の心中にある、事業の将来に関する企業家の確信を決定する影響にある、ということはあることではないのか? 以下の議論で検討されるのはこの方向の研究である」 (Lavington [1922] pp. 27-28)。

11) 価格の変化が金産出の変動、紙幣の過剰発行、銀行貸付の過度の拡張あるいは縮小のような原因による場合、「価格の動きは知性を喪失している。なぜなら気まぐれで無関連な原因から生じたからである。その影響は供給と需要を調整するのではなくむしろ供給と需要の調整を攪乱するのである」 (Lavington [1922] p. 26)。

長期間持続しうる」(Taussig [1911] vol. 1, p. 403) といい、例証として鉄道を挙げている。「鉄道は建設するのに長い時間かかり、多大の投資を必要とする。建設中および完成後しばらくはどれだけ利潤を生み出すかについて不確実性が存在する……。鉄道は新しい地域を開発したり、あるいは古い地域の地理的分業を再編する。数年間操業するまでは享樂財あるいは欲望充足の最終的増人が莫大な投資を正当化するようなものであったかどうか確実に知ることはできない」(Taussig [1911] vol. I, p. 404)。同様の誤算と調整の誤りはあらゆる設備建設で生じる<sup>12)</sup>。とりわけ固定資本に使われる原材料を供給する産業で顕著に現れる。鉄製品や鉄鋼は主として設備投資のために需要され、最終的にはより多くの消費財を生み出すことになる。「けれども、需要されるのはどのような種類の消費財なのか、あるいは利潤を生む価格で販売できるように需要に対応しているかどうか予測はきわめて困難である。(改行) 心理的要因が作用し始めるのはここである」(Taussig [1911] vol. I, p. 404)。

タウシグが資本主義的生産と誤算および誤調整とを直接結び付けているのに対し、ラヴィントンは企業家を強調する。じっさい、ラヴィントンの場合、生産には時間がかかることは現代組織の本質的条件の第二の条件であり、第一の条件は自分自身の判断と自分自身のリスクで行動する独立の企業家が生産の責任を負っていることなのである。

ラヴィントンは企業家を「おのおのの一連の活動において生産を開始し組織する責任を引き受ける実業家」と定義し、具体的には、「その働きが最も顕著に現れている製造業者あるいは商人」<sup>13)</sup> としている (Lavington [1922] p. 20)。

12) ホートリーは予測の誤りが懐妊期間を経た後でしか判明しないという点でビグーは間違っていると批判し、「期待は経常需要によって連続的に検証されている」(Hawtrey [1928] p. 165) と述べたが、商人がコアであるホートリー理論の性格をよく物語るものである。

13) ラヴィントンは「経常的事業活動は製造業者の製造しようとする気持ちに依存するのと同じくらい商人の買おうとする気持ちに依存するということに留意することが重要である」(Lavington [1922] p. 20) と述べて商人の重要性を強調している点が興味深い。タウシグも「恐慌の進展に関する議論において無視されすぎている部分は流通業者——卸売商人、証券仲買人、小売商人が演じる役割である」(Taussig [1911] vol. I, p. 405) と述べている。ホートリーは心理説を否定したが、心理的要因を強調する理論家も商人の重要性は相応の注意を払ってい



「企業家は経済組織の中心に位置する。なぜなら社会のすべての生産資源は企業家の支配の下を通過するからである。将来の需要を見積るのは企業家である。そして将来の需要に対して資源を今動かすのは企業家である。将来の状況に関する企業家の予測が楽観的であれば、彼が支配する生産集団は現在活発であり、他の集団の生産物に対する市場は良くなる。逆に、企業家の予測が悲観的であれば、その生産集団は現在不活発であり、他の生産集団の市場は悪くなる。したがって、現在の事業活動が好況なのか不況状態なのかは将来の需要状態に関する企業家の予測しだいである。要するに、景気は企業家の景気見通しにおける確信に左右される」(Lavington [1922] p. 27)。

ラヴィントンの場合、生産に時間がかかることは、生産が事実ではなく予測に基づかねばならないということと結び付けられている。「事業活動は現行の条件に依存するのではなく、将来のある時点での自分の市場の状態に関して企業家が形成する予測に依存する」(Lavington [1922] p. 20)。「将来需要がより先になればなるほど必要な準備はより入念になる。さらに競争者の動きに関する企業家の知識が不完全になればなるほどリスクは明らかに大きくなり、予測を誤る可能性も大きくなると言えるだろう」(Lavington [1922] p. 21)。

ピグーの場合、生産に時間がかかることと誤りが生じる可能性との結びつきが議論の最初に論じられるのは『厚生経済学』においてである。『富と厚生』では誤りの持続期間に関する3つの推論の一つでしかない。「最初の命題は、どの国でも誤りの範囲したがって誤りの変動は、鉄道建設が見込むような、社会の投資の収益が遠い将来になればなるほど大きくなる傾向があるということである」(Pigou [1912] p. 465)。

ピグーは実業家が形成する予測の誤りの大きさを決定する諸力を

① 「現代の産業の特徴的形態」

- i) 「交換的側面」<sup>14)</sup> ii) 「先見性」 prospectiveness

ゝるのである。

14) 各集団が自足的な場合、生産は自己消費を目的とし、投資に関する予測は物的生産性に関する

② 「行動の基礎となる予測形成機能を委託された人々の能力」<sup>15)</sup>

③ 「種々の人々の予測が相互に作用する仕方」

④ 「発生した誤りの再生産力」 reproductive power of the errors

に分類しているが、「先見性」で論じているのは、他の競争者の動きに関する企業家の知識の不完全性である<sup>16)</sup>。

『厚生経済学』ではピグーは次のように述べる。「事業界が楽観・悲観のどちらの誤りもない中立的状態にあるとしよう。その状況で、豊作、休戦、新産金の突然の流入、関税の改定、政治的風評、重要な資本建設産業において寿命が来た設備機械を更新する必要など事業活動に対する需要増大を引き起こすな

---

る予測で十分である。他方、市場生産の場合、各生産者は自己の生産物と他の生産者の生産物との交換比率をも予測しなければならない。「そうした環境が誤りの範囲を拡大するのは明白である。なぜなら、各生産者は予測形成に際して、自分の産業だけでなく、数多くの他の産業——その多くは必ずしも知ってはいない——についてありそうな状況を考慮することを強いられるからである」(Pigou [1912] p. 456)

15) 所有と経営の分離に基づき、投資に関する予測は経営者だけでなく外部者の予測も関連を持つ。外部者は専門的金融家と一般大衆株主からなる。一般大衆は「格別な知識あるいは能力を持たない」(Pigou [1912] p. 458)で、「ギャンブルの興奮を享受する」(Pigou [1912] p. 458)。専門的金融家はより正確な予測をするとはいえ、しばしば誤った情報を流したり仲間の予測を捻じ曲げたりする。一般大衆の予測と専門的金融家の予測のどちらが支配的になるかは産業の性質、伝統によるので一般的解答は可能ではないが、専門的金融家の相対的重要性が大きいほど誤りの範囲が小さいことは明らかである。ピグーは、より無知な人々を排除あるいは相対的重要性を低下させる工夫として、ドイツにおける低い額面金額での株式発行の禁止および銀行による引受の事例を挙げている(Pigou [1912] p. 459)。この事例は論文「景気循環の矯正」(Pigou [1924] p. 132)、『産業変動論』(Pigou [1929] p. 75)においても述べられている。

16) 人が将来財の獲得を目的に労働購入に資力を投資することを熟慮するとき、所与の量の労働が直接あるいは交換によって間接的にもたらす将来財の数量について、あるいは所与の資力で購入できる労働量について、誤る可能性がある。「投資行為が常に完成のすぐ直前で決意されるならば後者の誤りはありえない。しかしながら、現代社会では多くの資本財建設は作業遂行に長い時間必要で、それゆえそれに用いられる多くの労働および原材料が必要となる前の数ヶ月先あるいは数年先に契約が締結される必要がある。それゆえ『先物買い』現象が生じる。より長期の生産過程の企業は将来の時点でより短期の生産過程の企業からある報酬率である額の購入をする先物契約を締結する。けれども、労働やある種の原材料については一般に先物契約は実行可能ではない。したがって、労働または原材料に関しては、将来の引渡しでそれらが売られる条件について企業が考慮するとき、費用の大部分に関して推測で我慢しなければならない。けれども各企業は推測するに際して一般に他企業によってなされる先物契約に関する情報をもたず、そうした契約が実行されるときに労働と原材料の実質価格に及ぼすであろう影響を無視する傾向がある。それゆえ、楽観的期待への一般的動きは契約と契約の実行が同時である場合よりもいっそう進行しがちである」(Pigou [1912] pp. 456-457)。

んらかの実物的要因が生じたとする。もしすべての事業活動がその果実を即座にもたらすならば、そうした需要増大要因がいささかでも楽観の誤りを発生させることはありえない。なぜならそうした誤りが生じて影響をもったとしても瞬時に発見され是正されるからである。けれども現実には産業的活動が即座に利潤を生むということはきわめて稀であり、即座に実際の物的産出を生み出すということもそれほど多くはない。たいていの消費財は作るのに時間がかかり、倉庫しておそらく仲介業者の手を経た後、買おうとする消費者に届くにはなお一層時間がかかる。そして資本財購入者は資本財からの利潤を当然のことながら、その資本財が生産を助ける消費財が生産され販売されるまでは実現できない。業種が違えば期間は異なるが、ほとんどすべての業種においてある時間の経過——いわば先見性——が存在する。この事実こそが即座には是正されない楽観の誤りの進展を可能にするのである。そしてこの種の誤りが実際に進展することを蓋然的にするいくつかの影響がある」(Pigou [1920] p. 833)。

ここでもピグーは影響を4つ挙げている。

- ① 需要増大の元となる実物的要因が実業家の富を増大させる結果、実業家が物事の明るい面を見ること。「幸福は将来の幸福の期待を生み、成功は更なる成功の希望を生む」(Pigou [1920] p. 834)。
- ② 高利潤に誘われて資本財を発注しても、資本財が完成して消費財が産出するまでは高利潤が続くから、更に資本財を発注する可能性があること。部屋が暖まるまで時間がかかるので必要以上に薪を投入してしまうというアフタリオンの例を引いている (Pigou [1920] p. 835)。
- ③ 現代の産業が多数の独立の生産者からなるため、需要変化に対して個々の生産者が他の生産者の産出変化を十分に考慮しない、あるいは新規参入者が既存企業の産出変化を十分に考慮しないということ (Pigou [1920] p. 836)。
- ④ 原材料から完成品までの生産過程が多数の独立の生産者によって担われるために発生する『先物買い』現象 (Pigou [1920] pp. 836-837)。これは

『富と厚生』での「先見性」の議論(脚注16参照)である。

#### IV 企業の相互依存性——乗数波及過程か？

本節ではラヴィントンの4つの「現代組織の本質的条件」の3番目、企業の生産物の相互依存性を議論しよう。というのは、平井 [1993] がビッグ、ラヴィントンは「乗数波及過程」に注目しつつ企業の相互依存性をとらえていると主張し<sup>17)</sup>、ビッグがラヴィントンの不況理論は「紋切り型の古典派の見解よりも有効需要の失敗およびケインズの失業状態にずっと近い」(Bigg [1990] p. 128)と主張し、やはり企業の相互依存性に注目しているからである。ビッグはラヴィントンの次の文章を引用する (Bigg [1990] p. 128)。

「彼の支配下にある生産集団は低い操業度で生産している。なぜなら、より多く生産すれば追加的生産物を売ることができるという合理的な期待をなんら持てないからである。なぜ追加的生産物が売れないのかと問われれば、答は消費者が買わないからである。なぜ消費者が買わないのかとさらに問われるならば(問われねばならないことだが)、答は買うことができないからである——彼ら自身生産していないからである」(Lavington [1922] p. 23。強調はイタリック)。

そして企業は財市場に制約され家計は労働市場に制約されるとして、ビッグは次の文章を引用する (Bigg [1990] p. 129)。

「全般的な不況期において、個々の企業が低い操業度であるのは他の企業が低い操業度だからである。どの企業も活発でないのは一般的消費力が低下しているからである。一般的消費力が低下しているのは生産活動が一般的に低下しているためであり、それに比例している。すべてが不活発であることが、それぞれが不活発であることの原因である」(Lavington [1922] p. 24)。

17) ヘーゲランドはビッグの「乗数波及過程」を論じている (Hageland [1954] pp. 19-23)。ビッグはバジヨットの「乗数波及過程」を論じており、ヘーゲランド (Hageland [1954]) はバジヨットの議論を乗数理論の先駆としているからである。

ピックはクラウアー、レーヨンフーブドに言及しているが、クラウアー自身、〈ラヴィントンの『景気循環』は『一般理論』よりもずっと明晰な一般理論の説明である〉と述べている (Kates [1998] p. 108)。

しかし、ケーツは「ラヴィントンは類稀な明晰さと適切さで市場法則を産出と雇用の変動を説明するのに用いている例である」(Kates [1998] p. 108) といい、ピックが引用した文章自体 (とくに強調部分)、需要が供給によって制約されるという市場法則の本質を明瞭に示していると述べている (Kates [1998] p. 109)。

ケーツによれば、次の8つの命題が市場法則を形成する (Kates [1998] pp. 75-76)。

- ① 需要不足は景気後退の正しい説明ではない。需要を超過する財サービスの生産 (すなわち過剰生産) はありえない。
- ② 貨幣の媒介機能を通じて財は財を買う。人は自身の財を貨幣に変換し、受け取った貨幣で異なる財に再変換する。したがって需要は供給によって形成される。そして購買力が不足することはない。
- ③ 経済は追加的資本量を常に生産的に吸収し雇用できる。
- ④ すべての財が相互に適切な比率で生産されるならば、生産されるあらゆるものは費用を回収する価格で市場を見出す。このことは、生産がどれだけ急速に拡張されるかにかかわらず、また資本がどれだけ急速に蓄積されるかにかかわらず、依然として正しい。
- ⑤ 企業家の予測の誤りが原因で特定の財が過剰生産される可能性はある (部分的過剰生産)。すなわち、特定の財については費用を回収する価格で販売できる以上に生産される可能性はある。
- ⑥ 特定の財または一群の財の過剰生産は一般的生産減退を導く可能性がある。最初の生産者集団が販売できず所得を得ることができないことが他の生産者の生産物に対する需要低下を招くという連鎖が経済全体に波及する。経済全体の販売が初めの予想を下回るならば生産減退が生じうる。

- ⑦ 景気後退（低生産と高失業で特徴付けられる）は実際に生じる。景気後退は、一般に、特定部門において生産が需要と乖離する、すなわち、生産される特定の財が所得稼得者の買いたいと思う財と一致しないということにもとづく。したがって、景気後退はなんらかの種類の市場の「混乱」が原因であり、総需要不足が原因ではない。
- ⑧ 事業の確信が消滅して貨幣需要の増大が生じるか、または意図的な政策の結果または信用創造過程の性質にもとついて信用の崩壊が生ずるならば、受け取った貨幣を財に再変換する過程は正常な場合よりも時間がかかる。したがって財に対する需要が収縮する。

これに対してハンフリー（Humphrey [2000]）は次の4つの疑問を提示している。

- ① 人間の欲望の非飽和性にほとんど注目していない。
- ② 主として循環的不況との関連だけを論じ、長期停滞との関連を論じていない。
- ③ セー法則支持者の不況の説明をもっぱら生産物構成の不適合に帰して、他の要因たとえば貨幣的要因による説明を無視している。
- ④ 価格メカニズムの作用を無視している。「第4に、ケーツの主張に反して、セー法則の古典派支持者が全般的な不況を一産業の供給過剰に帰しているということはあるまいに思う。なぜなら、セー法則の論理に従えば、過剰供給の産業の超過供給額は他の産業の超過需要額によって相殺されねばならないことになる。それゆえ、過小在庫となった産業は好況状態を享受し、それは過剰在庫となった産業の一時的な不況状態を相殺するであろう。さらに、好況部門で生じる超過利潤は、その部門の生産者をして産出拡大に駆り立てることによって、不況産業で解雇された資源の雇用を導き、失業は生じないであろう。つまり、ケーツは部分的過剰供給を修正し全般的な不況に導くことを阻むように作用する伸縮的価格メカニズムという古典派概念を見落としている。……それゆえ、彼のセー法則解釈はオ

リジナルな意味と幾分異なっている」(Humphrey [2000] pp. F277-F278)。

ハンフリーの4つの疑問の最初の3つは妥当するように思うが、4番目については議論の余地はおおいにありそうである。「セー法則の論理に従えば、過剰供給の産業の超過供給額は他の産業の超過需要額によって相殺されねばならない」というのは現代的なセー法則解釈であると思う。

価格メカニズムについてタウシグは次のように論じている。「誤りと誤算は生じるであろう。けれども救済策は単純で自動的であると思う。もしある財が利潤を獲得できる条件で売ることができるよりも多く生産されたならば、その財の生産は減少するであろう。遅かれ早かれ——大規模設備が必要な場合はおそらくかなりの時間がたった後で——生産者の一部が退出し、供給が減少して、価格が上昇し、過剰生産は解消する」(Taussig [1911] vol. II, p. 46)。「実際、若干の産業だけが利潤を得て売却できる以上に生産しているならば、労働と資本はそのような困難に陥っていない他の産業に移転できるし、移転されるであろう」(Taussig [1911] vol. II, p. 46)。

生産者の退出行動が言及されているように、価格メカニズムの作用は瞬時ではない。そして調整は完全ではない。タウシグは調整の不完全性から景気循環が生じると述べている。「じっさい、一部は幾分本当の『過剰生産』——現在の必要、おそらく現在であれ将来であれ必要以上に拡大したということに原因があるということができる。しかし、そうしたことは時間がたてば自己修正される。交換の機構は正常の働きを回復し、生産の誤調整は正される。しかしながら、不幸にも、既に述べたように、完全に正常な調整状態は決して実現されない。過度の好況の後には過度の不況が来る」(Taussig [1911] vol. II, pp. 54)。

セー法則とは何かという問題は大変難しい問題であり、これ以上立ち入ることはできないが、ラヴィントンに関する限り、ケーツの方が正しいと思う。じっさい、ビッグが引用した2つの文章の間には次の文章がある。

「それゆえわれわれが考察している種類の問題においては、『消費者』とし

て知られている集団は独立の存在たりえない。彼の本当の名称は『他の生産者』である。買おうとする気持ちに関する限りでは、彼は実在の人だが、買うことのできる力に関する限り、彼は他の生産者が見せる一つの側面にすぎない。彼が消費者として振舞う力は、資本家であれ企業家であれ労働者であれ、生産者としての彼自身の活動から得られている」(Lavington [1922] p. 24)。

さらにラヴィントンによる良好モンスーン<sup>18)</sup>の例は、価格不変の仮定の下での議論だけに、乗数波及過程を視野に入れているといえそうだが、引用文の最後の文章に注目して欲しい。生産増大が消費力の増大を形成するというところ、まさに市場法則なのである。

「他に強力な不利な条件がなければ(ここでは重要な限定条件である)、この出来事は、綿業の活動増大を期待させるので、他のすべての産業の企業家の確信を増大させる真の原因である。条件がはっきり良ければ、マンチェスター商人はカルカッタの需要増大を期待して紡績業者や織物業者に投機的な注文を出す。綿業における活動の若干の増大は、すべての生産者集団に現在の購買力および期待される購買力の増大をもたらすので、確信の増大を正当化し、購買力が支出される生産物の産業すべてに、多かれ少なかれ、現在の活動の増大をもたらす。紡績業者や織物業者による現在および見込注文の増大は、綿の輸送に従事する内外運輸の活動、リバプール市場の商人、機械産業、染色工場その他多数の関連補助産業の活動を増大させる。同時に、労働者の現在消費および消費見込みの増大は地域の小売商人の確信を引き起こし、彼らは卸売り商人に対して在庫補充の注文を増大し、卸売り商人を通じて他の製造業者への注文を増大させる」(Lavington [1922] pp. 34-35)。

「刺激された産業のそれぞれの現在の活動および将来の活動見込それ自体が、綿産業の活動によって伝えられた最初の刺激と同じ仕方であらゆる方向へ波及する刺激となる。それぞれの産業の実業家の確信と活動の増大は、他のすべての産業の企業家の確信の増大したがって活動の増大の原因であるだけでなく、

18) モンスーンの到来が早すぎると洪水となり、遅すぎると旱魃になる。



それらを正当化するものである。もし事業判断が純粹に合理的ならば、各産業の確信は他の産業のより大きな確信のもっともな理由である。なぜなら生産量の増大はすべて消費力の増大を形成するからである」(Lavington [1922] p. 36)。

そもそも、マクロ的な所得支出循環を基礎とする乗数理論と、ピグー、ラヴィントンのようなミクロ的生産者相互間の交換を基礎とする波及理論とは、出自も分析視角も異なる議論である。

### 参考文献

- Bagehot, W. [1873] *Lombard Street*, John Murray, 1920. (宇野弘蔵訳『ロンバード街』岩波書店, 1984 (1941) 年)。
- Bigg, R. J. [1990] *Cambridge and the Monetary Theory of Production*, Macmillan.
- Bridel, P. [1987] *Cambridge Monetary Thought*, Macmillan.
- Dorfman, J. [1946-1959] *The Economic Mind in American Civilisation 1606-1933*, 5vols, Augustus M. Kelly.
- Haberler, G. [1937] *Prosperity and Depression*, George and Unwin. (宇治田富造訳『好況及び不況の理論』清和書房, 1938年)。
- Hageland, H. [1954] *The Multiplier Theory*, Augustus M. Kelly, 1966.
- Hawtrey, R. G. [1928] *Trade and Credit*, Longmans.
- Humphrey, T. M. [2000] Review of "Say's Law and the Keynesian Revolution," *Economic Journal*, February, pp. F276-F278.
- Kates, S. [1998] *Say's Law and the Keynesian Revolution*, Edward Elgar Publishing.
- Lavington, F. [1921] *The English Capital Market*, Augustus M. Kelly, 1968.
- [1922] *The Trade Cycle*, Macmillan.
- Marshall, A. [1923] *Money, Credit and Commerce*, Macmillan. (永澤越郎訳『貨幣信用貿易』岩波ブックセンター, 1988年)。
- Marshall, A. and M. A. Marshall [1879] *The Economics of Industry*, Thoemmes Press, 1994. (橋本昭一訳『産業経済学』(1881年版), 関西大学出版部, 1985年)。
- Mitchell, W. C. [1913] *Business Cycle*, University of California Press.
- Niehans, J. [1992] "Juglar's Credit Cycles," *History of Political Economy*, 24, pp. 545-569.

- Pigou, A. C. [1912] *Wealth and Welfare*, Macmillan.
- [1913] *Unemployment*, Williams and Norgate.
- [1920] *The Economics of Welfare*, Macmillan.
- [1924] "Correctiveness of the Trade Cycle" in *Is Unemployment Inevitable?*, ed. by W. T. Layton. Reprinted in *Business Cycle Theory*, vol. III, ed. by H. Hagemann, Pickering & Chatto, 2002, pp. 119-159.
- [1927] *Industrial Fluctuations*, Macmillan.
- [1929] *Industrial Fluctuations*, 2nd ed., Frank Cass, 1967.
- Robertson, D. H. [1915] *A Study of Industrial Fluctuation*, London School of Economics, 1948.
- Schumpeter, J. A. [1951] *Ten Great Economists*, Oxford University Press. (中山伊知郎・東畑精一監修『十大経済学者』日本評論社, 1952年)。
- Taussig, F. W. [1911] *Principles of Economics*, 2vols, Macmillan.
- [1921] *Principles of Economics*, 3rd ed. 2vols, Macmillan. (長谷部文雄訳『経済学原理』(全8巻), 弘文堂, 1923-1925年)。
- 小島専孝 [1997] 『ケインズ理論の源泉』有斐閣。
- [2003-2004] 「ビグーのマクロ経済理論の基礎とホトリーのビグー批判 (1), (2)」『経済論叢』第172巻第5・6号、第173巻第2号。
- 小峯 敦 [1995] 「ラヴィントンにおける企業者」『新潟産業大学経済学部紀要』No. 13。
- 菱山 泉 [1965] 『近代経済学の歴史』有信堂。
- 平井俊顕 [1993] 「ケンブリッジ学派における二つの流れとケインズ革命」(平井俊顕・深貝保則編『市場経済の検証』ミネルヴェ書房)。
- 本郷 亮 [2000] 「A. C. ビグーの景気変動論」『経済学研究』関西学院大学, 第31巻。